

正置富太郎\*・奥田武男\*\*： 欧州で行なわれた藻類の国際学会に出席して Tomitaro MASAKI and Takeo OKUDA: A brief report of the Xth International Seaweed Symposium at Göteborg and the International Phycological Society Meeting at Glasgow

最近2つの藻類関係の国際学会がひきつづいて行なわれ、いずれも盛会裡に終了した。まず美しい自然に恵まれたスカンジナビアのノールウェ、スウェーデン、デンマークのお世話で第10回国際海藻シンポジウムが去る8月11~15日にスウェーデンのGöteborgで開かれ、それと前後して見学旅行も計画された。最初の旅行を希望する人達は8月6日の朝にCopenhagen大学のCHRISTENSEN教授のところに集まり昼食を共にし、午後は数班に分かれてそれぞれに出掛けた。そのうちの一つは大学の標本室で、有名なBØRGESENやROSENVINGEの標本が所蔵されていて、それらを手にして改めて深い感銘に打たれた。翌朝は2班に分かれ、スウェーデン南部に旅立った極く少数の人達を除いて約30名(日本人9名を含む)がバスにのり、デンマーク北端の町Frederikshavn目指してCopenhagenをあとにし4日間の旅に出発した。一行は途中この国特産の寒天原藻*Furcellaria fastigiata*(紅藻ススカケベニ科)の産地Havnsøに立ち寄り、採藻状況を見学する筈であったが、相憎と漁師が休暇をとっていたため操業が中止されていて残念乍ら好機を逸した。しかし、加工施設だけは見ることが出来たがそこも運転を休んでいた。ここでも原藻の不足のため東南アジアから*Eucheuma*(紅藻キリンサイ)を輸入して補っていたのには驚いた。その日のうちにデンマーク本土のJutlandにフェリーボートで渡りRold Storkoの郊外にあるホテルで第1日目の夢を結んだ。翌日は正午近くに目的地のFrederikshavnにあるCopenhagen大学の臨海実験所に到着し、そこに勤務して、海藻の培養などを行っているうら若い女性研究者NEILSENさんの歓迎をうけ、午後は近くにある北ヨーロッパ最大の砂丘に赴き、楽しい一時を過し、その後ホテルと実験所に分かれて旅装をといた。翌朝2そうの漁船に分乗して沖合の小島に渡り海藻採集をした。小雨まじりの肌寒い天候であったにも拘らず御老体のCHRISTENSEN教授が素潜りで我々のために深所の大型褐藻類を採集されたのにはびっくりしたが、感謝をこめて教えていただいた。採集品は実験所にもち帰って、学生実験室のテーブルの上にそれぞれ種毎

に小容器に入れて並べられ種名を記した紙と共に展示され、リストを見乍ら調べることが出来た。夕食後は実験所の2階の一室にお茶を飲み集った人達が、何時の間にかお酒の席に変わり、こぞってコーラスをして夜半すぎまでデンマーク最後の夜を楽しんでいた。翌日はFrederikshavnからフェリーボートで4時間の船旅を楽しみ乍らGöteborgに向った。到着と共に満面に笑みを浮べたLEVRING博士が出迎えてくれ、一同は学会もいよいよ本番になったとの感を強くした様である。学会中は晴天が続き気温も25°C前後まで上りSanta Barbaraから来られたGIBOR博士はまるで熱帯にきた様だと言われた程の異常気象ではあったがまずまずの天気で幸であった。参加者は34カ国、280名程(内、日本人は新崎先生御夫妻を含めて約15名)で、大学の学生寮やホテルにそれぞれ分宿し、会場はそれらの宿舎から近い市内のSvenska Mässanと言う貿易展示会場用の建物(写真-1)が当てられたが、間取りも学会を催すには便利に出来ていた。講演や発表はA, B, Cの3部屋が使われ、そのうち比較的大きなA及びB室は隣り合わせになっていて、聴講のため移動するには便利であり、A室では分類、分布、生活史、生態などの純生物学的なものが多く、産業種のほかにも一般海藻類を対象にしたものもあった。B室では主として産業に直接関係したもの



写真-1 第10回国際海藻シンポジウム(Göteborg)の会場にあてられたSvenska mässan(中央の高い建物)

で、生化学、成分変化、生理学、生長、養殖、施肥などの内容は多岐にわたっていた。両室は大ホールに接していて、午前と午後のお茶の時間には、お互いに挨拶を交わしたり、論議をするのに好都合であった。C室は離れていて少し狭いが Pharmacy (薬剤) の session に用いられた。この session は今回はじめての試みであったが、講演数も予想外に少なかった様である。発表された論文数は A 室 57, B 室 55, C 室 26 で、その他にポスター session があり大ホールの壁が利用された。特別講演は毎朝 9 時から始まり、又その日の一般発表の終わった後にも行なわれることがあった。それは 7 人の方々により、海産褐藻類の性誘引物質 (MÜLLER), カリフォルニア産大型海藻の培養 (NEUSHUL), 南アメリカの海藻研究史 (OLIVEIRA), 紅藻多糖類と分類 (STANCIOTT), 中国の海藻養殖 (TSENG), アルギン酸の生体内合成 (LARSEN), 海藻の生育と光との関係 (LÜNING) の題名のもとに、それぞれ興味ある内容で 45 分間ずつ話された。シンポジウムで発表されたものについてはすべて近いうちに出版されることになっている。今回は中国科学院海洋研究所の曾所長をはじめ呉並びに紀両博士 3 名の方々をはじめで参加され、特に曾博士によって紹介された青島での養殖の実態についての講演には多数の人々が聴講した。会期中は毎晩の様パーティが催されて参加者同士の交流には事欠かなかったが、その中でも圧巻であったのは 13 日午後行なわれた Marstrand 島への 1 時間のバス小旅行で殆んど全員が参加し、海藻採集 (写真-2) をしたり、散歩をたのしんだあとでエビのデナーパーティがあり、学会で疲れた頭をときほぐした。学会最後の夜は市内のホテルでお別れの宴会が催され、すばらしい御馳走をいただき乍ら、DOTY 博士が国際組織委員会議長をやめられ、代りに MCLACHLAN 博士が就任されたこと、及び 1983 年には中国の青島で学会が



写真-2 Marstrand 島 (スウェーデン) における海藻採集

もたれ、1986 年にはブラジルの予定であることが一同に披露されて、別れをおしみつつ、又、再会を約し乍ら散会した。

その後ノルウェーの Bergen を中心にした見学旅行にも多数の参加者があって、美しいフォールドを楽しみ乍ら、稔り多い成果を収めた。

ひきつづいて 8 月 19~22 日までスコットランドの Glasgow 大学で国際藻類学会集会在開催され、Göteborg の学会から参加された方々も大勢おられた。Glasgow では肌寒く小雨のバラつく天候で晩秋を想わせる様なただずまいに終始したが、100 名以上 (内、日本人は広瀬先生御夫妻とわれわれを合せて 4 人) の参加があり、殆んど全員が Queen Margaret Hall という大学の女子学生寮に宿泊して会期中をすごした。食は気をつくとすると言う諺があるが、朝から夜おそくまで顔をつき合わせて全くたのしい日々を送り得た。この学会のお世話は主として Glasgow 大学の BONEY 博士によって取り行なわれ、繁雑な事務を短期間のうちに手ぎわよく処理されておられるのは心から感謝と敬意の念をいただいた次第である。口頭発表は階段教室で行なわれ、取り消しもあったが、発表数は 62 で淡水藻に関するものが多数で目立った。この学会は Santa Barbara で行なわれた第 9 回国際海藻シンポジウムで論議された通り、純学問的な内容をもった論文を発表するために、国際藻類学会が主催して開かれたもので、応用面を主体とする海藻シンポジウムとはその目的を異にするものとして発足した。この様な学会の性格を含めて PAPENFUSS 会長のもとで評議員会が 3 回もたれ、夕食後夜半近くまで熱心な討論が行なわれ、その中には次期学会は日本が世話をしないかと言う話まで出たが、総会では今後は International Phycological Congress の名称にして、次回は 1982 年にカナダで取り行なうことなどを決めた。又、総会では SILVA 博士が国際藻類学会の歴史について講演され、オーストラリアでは藻類学会が発足し、初代会長には WOMERSLEY 博士が就任されたことも披露された。予定されていた Loch Lomond への小旅行も都合により取りやめになり、非常に地味な学会となったが、21 日には Glasgow 大学の招待で晩餐会がもたれ、そのあとで地元のスウェーデンダンス保存会 (?) の人達による踊りがあり、出席した人々も共に踊りの輪の中に入って夏の一夜を心ゆくまでに楽しんだ。発表された論文の要旨は関連記事及び記念写真と共に Phycologia に掲載の予定である。(\*041 函館市港町 3-1-1 北海道大学水産学部, \*\*812 福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学農学部)